「２人が暮らすための方法について」

＜序章　２人で暮らす家＞

　地方都市の中古の２ＬＤＫのマンション。自宅としてこの間取りを求めるなら世帯構成が夫婦と保育園児で計３人というのは無難な線だといえる。
　安田篤人が世帯主として住所を置く２０４号室の住人は、数ヶ月前に確かに１人減となった。それは彼自身も認識している。しかし、さらに１人減となっていたという知らせは何の前触れもなくもたらされた。
　目覚めたとき、篤人は自分がいつの間にかリビングのソファで眠っていたのだと認識するのに少し時間がかかった。不恰好な姿勢で横になっていたからか、あまり寝覚めはよくない。体を起こし、だらしなく開いたカーテンの隙間に目をやれば夕闇がのぞいている。電気もつけずに左右の首筋を伸ばしつつトイレに向かい、用を足してリビングに戻ると薄暗い部屋の中で赤い光が目についた。
　パソコンデスクの横にある、ほこりをかぶってほとんど使っていない固定電話。そこに留守電の着信があったことを示すランプが点滅していたのだ。実家からでも連絡があったのかと思いつつそのランプを兼ねた再生ボタンを押すと、聞き覚えのない女性の声が流れてきた。
「こちらは県東部児童相談所です、安田様のお宅でしょうか、お知らせしたいことがありますので０００－×××－△△△△まで至急ご連絡をお願いします」
　児童相談所と名乗る電話に最初は間違い電話ではないかと考えたが、この番号で「安田」とはっきり認識している様子だった。
　加えて気になることがあった。もっぱら携帯電話を連絡先としているので、この固定電話の番号は最近では全くと言っていいほど書類などには書いていないのだ。なのにどこから伝わったのか、そんな疑問も抱きつつ、立ったまま少し身をかがめてリダイヤルボタンを押した。受話器を耳に当てながらデスクの椅子に腰掛け、呼び出し音に耳をすます。
「はい、県東部児童相談所です」
２コールで女性が出た。
「安田と申します。留守番電話に着信があったので電話しました、どういったご用件でしょうか」
「少々お待ちください、お電話を差し上げた者に代わります」
　保留音が流れている間、振り返って壁の時計を見た。１８時を回っている。しまったという思いがよぎったのと同時にさっきとは別の声が耳に飛び込んできた。
「お待たせしました、お電話を差し上げた佐伯と申します」
「安田です」
「安田篤人様でしょうか」
「はい」
「お電話ありがとうございます、実は、お子様の豊くんのことでお伝えしたいことがありまして」
「はい、ああ、でも今から保育園に迎えに行かなくちゃならないんで、できれば手短にお願いできますか？」
　保育園のお迎えの時間は１８時なのだ、遅れるなら遅れるで園に連絡をしなくてはならない。また時計に目をやりつつ、あせりから口調が少し早口になる。
少しの沈黙をはさみ、佐伯と名乗った女性は迷いなく言い切った。
「お迎えに行っていただく必要はありません」
「はい！？　ちょっと、それはどういうことですか？」
　思いがけない通告に声が上ずる。しかし相手はその反応を気にも留めていないように続ける。
「豊くんは、私ども東部児童相談所で一時的に保護させていただいています」
「保護？」
（何が起きているんだ、豊は今保育園にいるはずじゃないのか？）
　篤人にはその言葉の意味するところが瞬時には理解できなかった。浮かぶ疑問を置き去りにしたまま相手の言葉は続く。
「はい、電話では十分に伝わらないこともあるかと思われます、なのでこちらにお越しいただいたうえでご説明したいのですが、ご都合はいかがでしょう」
「……豊に何かあったんですが、事故にでもあったんですか？」
「事故というわけではありません、今は安全な場所にいますし、元気な様子です」
「じゃあ、何で保護なんてしてるんですか？」
「そのことも含めてご説明しますので、まずはお越しいただけませんでしょうか」
「そんな……」
（事故でもないのになぜ保護なんてされてるんだ。それにろくな説明もせず、とりあえず来いというのはどういう了見だ）
　いろいろと問い質したいことが頭の中に溢れるが、起き抜けの思考では何からどう話すべきかうまく整理ができない。ささくれた気持ちを落ち着かせてからでないと、不用意な言葉を口走ってしまいかねないと理性が危険を訴える。落ち着け、と自分に言い聞かせてから、なるべく穏やかな言葉を選んで喉から絞り出す。

「わかりました、どこに行けばいいんですか」
「東部児童相談所です。県の東部総合事務所、中央郵便局の南側の建物をご存知でしょうか？」
　自分の行動範囲にはない、初めて聞く建物だと思いつつメモを取る。
「知りませんけど、調べて行きますよ、あ、ただちょっと」
「はい？」
「すぐには無理です、今日行けたら行きますよ」
「え、あの……安田さん？」
　言葉を継ごうとした佐伯に対し、これ以上のやりとりは無用とばかりに篤人は電話を切った。
　ため息をつくと目の前がチカチカし、こめかみを中心に脈打つような頭痛を感じた。受話器を放した腕をだらりと下ろし、椅子からソファへ倒れこむように乗り移る。受話器を握っていた左手から心臓にかけ、しびれたような強張りを感じたまま体を横たえる。何かをするべきだとは思いつつも、動かない体は小刻みに震えている。
　部屋に響くのは電源を入れっ放しのパソコンのうなり声と、先ほどまで心を追い立てていた時計の秒針の音だけ。７０平米の安田家、畳に換算して２２畳の広さは不相応だと揶揄するように、空虚さだけがその空間を埋め尽くしていた。